

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(25) : 開口具5 : 番目綜統2

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	296
ページ	59-61
発行年	2005-11-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5213

無縦 尽横

タテとヨコの 色とカタチの ファイールドワーク

25

吉本 忍

開口具5 番目綜統2



写真1 複合単式番目綜統型の開口具をと
もなった枠機(高機)によるサーミ人の機織
り(ノルウェー、マンダレン…1993年)

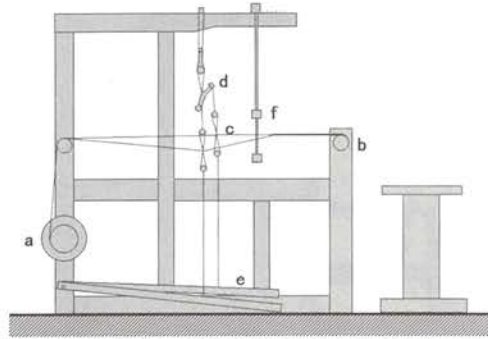


図1 マンダレンの枠機(高機)の構造
a-タテ巻き具、b-布巻き具、c-番目綜統、d-天秤、e-踏み木、f-筵

国立民族学博物館では、来年の9月から12月にかけて、わたしの企画による特別展「テキスタイル・グローバルゼーション」(仮題)を開催する。その準備のために、今年の夏以降、急遽、世界各地を飛び回ることとなったことから、先月号(10月号)の連載はやむなく休載としてしまった。したがって、今月号では9月号(294号)にひきつづき番目綜統^{つがめ}について紹介する。

複合単式番目綜統機

9月号で紹介しているように、複合単式番目綜統型の開口具は、設置方式が可動式の番目綜統が2枚1組で構成されており、開口方式は綜統可動式、開口機能は両口交互開口である。そうした開口具をもなった織機、すなわち複合単式番目綜統機は世界の広範な地域で普遍的にもちいられており、わが国で使用されている高機の多くも複合単式番目綜統機のうちに含まれる。なお、複合単式番目綜統機として位置づけられる織機には、タテ糸の張力にもとづく型式分類における枠機と腰機と錘り機が見いだされる。ただし、枠機については、前記のわが国の高機、およびそれらと同型式の織機、すなわち、タテ糸保持具

としてタテ巻き具と布巻き具をそなえ、足踏み式の開口補助具をもなった織機に限定される。以下ではそれらの具体例として、ノルウェーのマンダレンで使われている枠機(高機)、ゲアテマラのトトニカパンで使われている腰機、イランのヤズドで使われている錘り機、インドネシアのスマトラ島バヤクンブで使われている錘り機を紹介する。

マンダレンの枠機(高機)

ノルウェー北部のマンダレンに住むサーミ人のもとでは、今年の1月号(286号)で紹介した錘り機とともに枠機(高機)が使用されている。それらのうちの枠機では、タテ糸に木綿、ヨコ糸に細く裂いた木綿の布を使って平織組織の裂き織りがおこなわれている。タテ糸の整経方式は平整経式で、タテ糸の先端部はタテ巻き具に巻かれ、織りあがったタテ糸の手元部分は布巻き具に巻き取られている。この枠機の複合単式番目綜統型の開口具は、天秤仕掛けの2枚1組の番目綜統がそなわっており、2枚の番目綜統はそれぞれ紐を介して踏み木につながれている(写真1、図1)。

トトニカパンの腰機

ゲアテマラのトトニカパンに住むケクチ人の腰機では、タテ糸に木綿の白糸、ヨコ糸に色とりどりのウールの糸を使って、幅約5cm、長さ約4mの帯や頭飾りとしてもちいるためのヨコ畝組織の綴織物が織られている。タテ糸の整経方式は平整経式で、ループ状になったタテ糸の先端部は、民家の土間に打ち込まれた釘につながれた木製の鉤にかけられている。一方、先端部と同様にループ状になったタテ糸の手元部分には布巻き棒が通され、その棒に輪になった帯状の腰当がかけられている。この腰機の複合単式番目綜統型の開口具

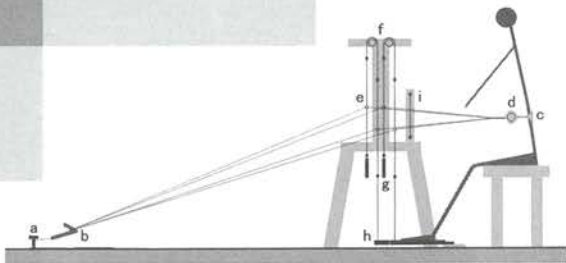


図2 トトニカパンの腰機の構造 a-釘(タテ糸間接保持具)、b-鉤(タテ糸保持具)、c-腰当、d-布巻き棒、e-番目綜統、f-口クワ、g-錘り(鉛板)、h-踏み木、i-筵



写真2 複合単式番目綜統型の開口具をと
もなった腰機によるケクチ人の機織り
(ゲアテマラ、トトニカパン…2000年)

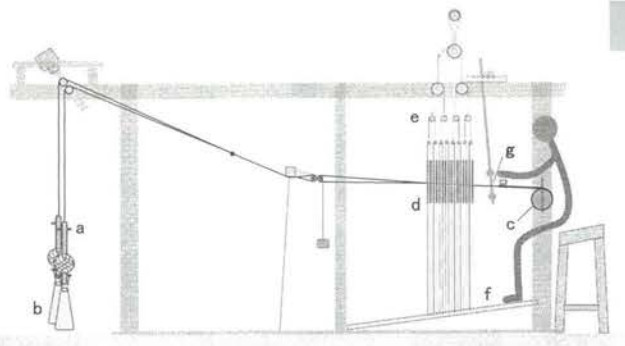


図3 ヤズド（イラン）の
錘り機の構造
a-先端棒、b-錘り、c-布巻
き具、d-番目綜統、e-滑車、
f-踏み木、g-筵



写真4 複合単式番目綜統型の開口具をともな
った錘り機によるミナンカバウ人の機織り（イ
ンドネシア、スマトラ島、パヤクンプ：1988年）

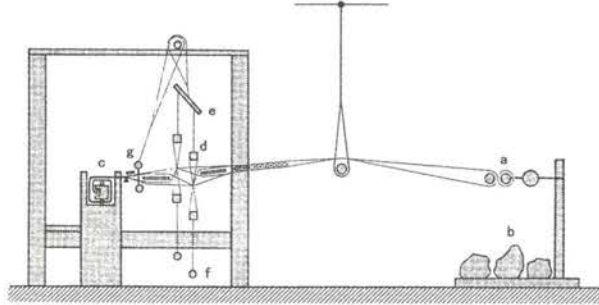


図4 パヤクンプ（インドネシア）の錘り機の構造
a-先端棒、b-重石、c-布巻き具、d-番目綜統、e-天秤、f-踏み木、g-筵

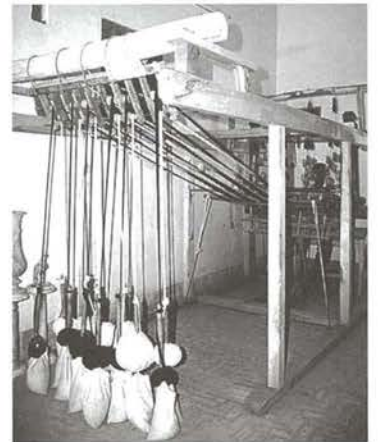


写真3 複合単式番目綜統型の錘り機に
よるペルシア人の機織り
（イラン、ヤズド：1998年）

としては、ロクロ口仕掛けの2枚1組の番目綜統2組がそなわっている。そして、2枚1組の番目綜統のうち1枚は紐を介して1本の踏み木につながれているが、もう1枚には紐りとして鉛板が結ばれている（写真2、図2）。

ヤズドの錘り機

イラン中部のヤズドに住むペルシア人の錘り機では、木綿糸を使用して礼拝用の敷布と

するための地組織が平織組織の紋織物（二重織）が織られている。タテ糸の整経方式は平整経式で、12束に分けられたタテ糸の先端部は、1束ごとに1本のタテ巻き棒に巻き取られており、合計12本のタテ巻き棒の下端には、砂と小石を袋詰めにした錘りが吊るされている。一方、先端部と同様にループ状になったタテ糸の手元部分は、機台に組み込まれた布巻き棒によって固定されている。この錘り機の複合単式番目綜統型の開口具は、2枚1組の番目綜統が8組で構成されており、1組ごとに滑車仕掛けの開口補助具に吊るされた合計16枚の番目綜統は、1枚ごとに紐を介して16本の踏み木につながれている。なお、このような錘り機はシルクロードで普遍的にもちいられている。それらは枠機のうちに包括される高機と類似した構造であるが、タテ糸の張力が錘りによって付与されていることから、高機とは織機の基本構造が根本的に異なっている（写真3、図3）。

パヤクンプの錘り機

インドネシアのスマトラ島西部のパヤクンプに住むミナンカバウ人の錘り機では、タテ糸に絹糸、ヨコ糸に金糸を使用して地組織が平織組織の紋織物（ヨコ糸浮織）が高床式の民家の床下で織られている。タテ糸の整経方式は平整経式で、ループ状になったタテ糸の先端部は先端棒に通されており、重石を載せた板に垂直に打ち込まれた棒（先端棒保持具）に結ばれている。一方、先端部と同様にループ状になったタテ糸の手元部分は、機台に組み込まれた布巻き棒によって固定されている。この錘り機の複合単式番目綜統型の開口具は、天秤仕掛けの2枚1組の番目綜統で構成されており、2枚の番目綜統の下には、それぞれ

複式番目綜統機

ブランコ状の踏み木が吊るされている。なお、重石を載せた板は、織り進むにしたがって手前に引き寄せられる。複合単式番目綜統機のうち、このような重石を載せた板をともなった錘り機は西アフリカで普遍的に使用されているが、その他の地域ではこれまでにインドネシアのパヤクンプの錘り機が知られているにとどまる（写真4、図4）。

複式番目綜統型の開口具は、設置方式が可動式の番目綜統が2枚1組で構成されており、開口方式は綜統可動式である。これらの点については、複合単式番目綜統型の開口具と共通しているが、複式番目綜統型の開口具の開口機能は片口交互開口である。そうした開口具をともなった織機、すなわち複式番目綜統機は、中国の雲南省徳宏傣族景頗族自治州の瑞麗県允悶村と路西県芒黑村に住む早傣族のもとでの使用例を確認しているにすぎない。ただし、早傣族の複式番目綜統機として位置づけられる織機には、タテ糸の張力にもとづく型式分類における枠機（高機）と腰機があり、以下ではそれらの織機を紹介する。

雲南省允悶村の枠機（高機）

中国の雲南省瑞麗県允悶村に住む早傣族のもとで使用されている枠機（高機）では、木綿のタテ糸とヨコ糸を使って白無地の平織組織の織物が織られている。タテ糸の整経方式は平整経式で、タテ糸の先端部はタテ巻き具に巻かれ、タテ糸の手元部分は機台に組み込まれた布巻き棒によって固定されている。この枠機の複式番目綜統型の開口具は、2枚1組の番目綜統で構成されており、番目綜統は1枚ごとに上部の綜統棒が天秤仕掛けの開口



写真6 複式番目綜統型の開口具をともなった杵機(高機)による早傣族の機織り(中国、雲南省潞西県芒黑村:1996年)

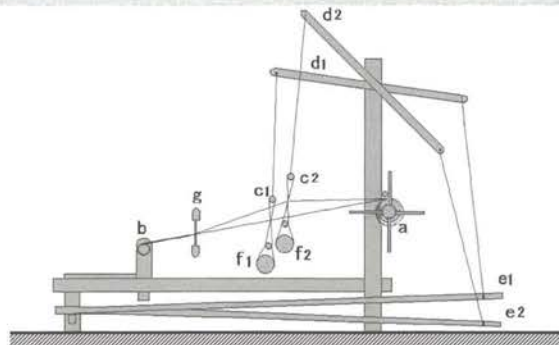


図5 雲南省允悶村の杵機(高機)の構造
a-タテ巻き具、b-布巻き具、c1~c2-番目綜統、d1~d2-天秤、e1~e2-踏み木、f1~f2-錘り(棒)、g-箆



写真5 複式番目綜統型の開口具をともなった杵機(高機)による早傣族の機織り(中国、雲南省瑞麗県允悶村:1996年)

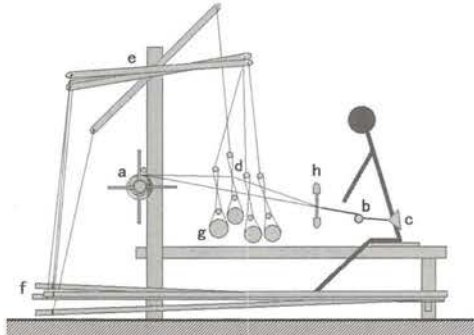


図6 雲南省芒黑村の腰機の構造
a-タテ巻き具、b-布巻き具、c-腰当、d-番目綜統、e-天秤、f-踏み木、g-錘り(棒)、h-箆

補助具の一方の端に紐でつながれている。そしてさらに、天秤仕掛けの開口補助具のもう一方の端は踏み木に紐でつながれている。また、下部の綜統棒には錘りとして機能する1本の棒が紐でつながれている(写真5、図5)。

雲南省芒黑村の腰機

中国の雲南省潞西県芒黑村に住む早傣族のもので使用されている腰機では、木綿のタテ糸とウールのヨコ糸を使って地組織が平織組織の紋織物(縫取織)が織られている。タテ糸の整経方式は平

整経式で、タテ糸の先端部はタテ巻き具に巻かれ、タテ糸の手元部分は機台に組み込まれた布

中山傳信録の絵画史料

巻き具によって固定されている。この腰機の複式番目綜統型の開口具の基本単位は2枚1組の番目綜統であるが、紋織物を織るために2枚の番目綜統が追加されて4枚1組の番目綜統で構成されており、開口補助具としての天秤仕掛けや踏み木もそれぞれ4本ずつそなわっている。そして、4枚の番目綜統は1枚ごとに上部の綜統棒が天秤仕掛けの開口補助具の一方の端に紐でつながれており、さらに天秤仕掛けの開口補助具のもう一方の端は踏み木に紐でつながれている。また、4枚の番目綜統の下部の綜統棒には、それぞれ錘りとして機能する棒が1本ずつ紐でつながれている(写真6、図6)。

今月号では、開口具として番目綜統を使用している複合単式番目綜統機と複式番目綜統機の具体例を紹介してきたが、9月号で述べ

ているように、番目綜統は単体で片口交互開口機能をそなえている。そうしたことから、番目綜統で構成される開口具の型式として、番目綜統1枚のみで構成される単式番目綜統型の開口具があっても不思議ではない。しかし、これまでのところ世界各地で使われている番目綜統をともなった織機のうちに、単式番目綜統型の開口具の使用例は確認できていない。

ただし、過去における単式番目綜統機の存在の可能性をうかがわせる史料として、18世紀前半の沖繩を記録した清朝冊封使、徐葆光によって著された『中山傳信録』巻第六の器具の条に見られる「織具」の記述(「機の形は、坐る所は狭く、外がひろい。高さは一尺五、六寸で、低く足をつけるので、三、四寸



図7 『中山傳信録』所収の「織具」

くらいしかない。機の前に竹竿、一本を立てて、それをバネにして、おさをひっぱってあげさせる。梭の長さは四寸あまり、皂角の形をしている。全体に小ぶりで、地面にすえよいようにしてある。各家に機がある。芭蕉糸をたていととし、白絹をまじえて織る」。原田禹雄(図7)がある。紙数がないために、ここでは詳細について述べることはできないが、この記述と挿絵の存在は単式番目綜統型の開口具をともなった単式番目綜統機が存在した可能性をうかがわせる史料として、きわめて重要であることを指摘しておきたい。

(国立民族学博物館民族文化研究部教授)

よしもと・しのぶ

文献

- 徐葆光 1982年 『中山傳信録』原田禹雄訳 言叢社。
- 吉本 忍・柳 悦州 2002年 『シルクロードの織機』シルクロード学研究会研究13『シルクロード織機研究』シルクロード学研究会センター。

吉本 忍

- 1987年 「手織機の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』12巻2号。
- 1990年 「インドネシアにおける手織り機の類型論的研究」『国立民族学博物館研究報告』15巻1号。
- 2002年 「イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区の地機と杵機と高機」、『シルクロード学研究会研究13』『シルクロード織機研究』シルクロード学研究会センター。